

今週も引き続き創世記を読みます。族長物語の山であるヤコブの隆盛から、ヨセフ物語のヨセフと兄弟たちの再会のクライマックスまでの経過を進んでいきます。トマス・マンの小説の題材にもなったヨセフ物語の劇的な内容は、この創世記の記述でも十分に小説以上の感動を引き起こすもので、教会学校では最もよく取り上げられる箇所の一つです。

第2週 (1月8日～14日)

創世記 24-26 章 イサクは母の故郷からリベカをめとる。アブラハムの他の子供と系図。イサクに双子の息子エサウとヤコブ。対象的な二人、兄が長子の特権を軽視。26章でゲラルに滞在中、イサクがリベカと戯れていた様子は、原語でも「いちやつく」というニュアンスを想像させられます。12章のアブラハムのエジプト滞在と同様の、飢饉の際の避難時の物語ですが、妻を妹と偽ったことがかえってイサクを危機に陥れたとも言えます。かつてアブラハムが掘った井戸が埋められていたのをイサクが掘りなおす。井戸の名前が、そのときの状況に因んで命名される。井戸の掘削は、イサクが祝福の担い手であることを示す。〔ゲラル滞在のキャンプ〕



27-30 章 : 母は強し！リベカの策略がヤコブを長子に。しかしヤコブは、兄エサウの怒りが怖く、伯父ラバンを頼って避難。旅の途中、石枕で天に届く階段の不思議な夢、ベテルの地名。神との対話。ラバンの家で働きながら従姉妹レア、ラケルをめとる。11人の息子に恵まれ、羊、山羊を、ヤコブのみごとな知恵で増やします。横取りしたがるラバンと駆け引きをして自分の財産として取り分を確保する。

31-34 章 : 伯父に仕え、貢献しても従兄弟たちにうとまれ、ヤコブは遂に妻子、財産を携えて再び故郷に。無断で脱走したと伯父は追撃。将来互いに戦わない約束を交わして石塚を。途中、神と格闘、片足が不自由になる。大挙して迎えた兄エサウが、寛容に一家を受け入れた。娘ディナが宿営地の男に辱められたことに怒った息子レビとシメオンが彼らを殺し、町を略奪。一家は苦境に陥る。

35-37 章 : 神に示されてベテルに移動、ヤコブはイスラエルと名乗る。愛妻ラケルは12人目のベニヤミンを難産し死ぬ。兄エサウすなわちエドムの系図と王国。さて、ヤコブの愛するヨセフが、賢さ故に兄たちの嫉妬を受けて井戸に落とされ、エジプトに売られる。ヨセフの血の衣を見てヤコブの嘆きは死ぬばかり。創世記終章の展開に入る。

38-40 章 : ユダが息子の嫁との間に子を設ける挿入話、この子孫にダビデそして、大工ヨセフとその子としてお生まれになるイエスが。エジプトのヨセフは政府高官に見込まれるが、夫人の誘惑を拒否してはめられ、投獄される。獄中で王の給仕長、料理長を通して王の夢解きをする。ヨセフの面目躍如、主が共におられる！

41-43 章 : 急転回でヨセフは獄から開放され、今度は直接王の夢解き。飢饉を予測、なんと30歳で宰相の地位に。妻も与えられ、息子マナセとエフライム(後に有力な氏族の一つになる)を得る。予測どおりの飢饉のなかでかつて憎まれた兄たちが食糧を求めて来ました。ヨセフであることに気付かぬ兄たち、ヨセフは一計を講じる。

44-46 章 : スパイ容疑をかけられる兄たち、ユダが人質に。ベニヤミンが同席する食卓でヨセフが自分の身を明かし、涙の対面をします。父ヤコブは、あれほど死を悲しんだ息子の生きている知らせに気が遠くなった。そしてエジプトに呼ばれて嬉しい再会。その後、豊かなゴシェンの地に一家が住めるよう周到な準備がされます。